

# 六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りつか  
chairman Yamada Rokko  
secondary c, and the  
editor in chief Kotori  
cover designed by little birdy

9月号

たん  
丹

女郎蜘蛛

山田六甲

し 宿敵の角打ち合へる兜虫

ゆ 柚子青し素麺つゆの葉味とす

く 靴脱いで灼けたる砂を走りけり

じ 上段の木刀迷ふ西瓜割

よ 夜は更けて待ち続けをり流れ星

は 浜暮れて水着の砂を払ひけり

し 島の子の夕風に舟漕ぎ出しぬ



ん ん む む む 奥歯で喰る 温め酒

し 白じらと夏涸川に出水痕

を 女郎花足して七草ととのひぬ

た 台風の目に入るや蝉鳴き始む

の 飲み物を乗すや傾く盆の舟

し 島人の貴人顔なる魂送

ま 松の根を枕にしたる三尺寝

こ  
し  
み  
じ  
み  
と  
聴  
く  
鉦  
叩  
夜  
は  
深  
む

れ  
ゆ  
く  
末  
は  
知  
ら  
ず  
精  
霊  
舟  
送  
る

が  
靴  
音  
を  
ひ  
そ  
め  
て  
出  
づ  
る  
星  
月  
夜

さ  
熟  
し  
た  
る  
桃  
の  
産  
毛  
の  
や  
さ  
し  
か  
り

い  
寄  
り  
か  
か  
る  
樹  
に  
秋  
冷  
の  
確  
か  
な  
り

あ  
遙  
か  
へ  
と  
見  
送  
る  
雁  
の  
渡  
り  
か  
な

く  
敷  
物  
を  
替  
へ  
て  
座  
敷  
の  
秋  
初<sup>はじめ</sup>



な んあううと児このねだりたるねこじやらし

ど 静けさのいや増すばかり虫集すだぐ

と 男衆おとこしの皆手酌なる月の宴

い 暈に手ついて眺むる望の月

え 野を渡る色無き風を見てをりぬ

る しなしなと揺れてをりけり柿簾

あ 薪積みし上に夜露のしとどなる

# 葉桜の雫をよけて歩きをり

松下 幸恵

はざぐらのしずくをよけてあるきをり まつしたゆきえ

若葉かな山々パセリのやうになり

北国の土産賜る梅雨晴間

マンションの隣に棚田梅雨に入る

新樹光溢るる庭をながめをり

花のあとの若葉の美しさが葉桜の本意。その桜の若葉からまばゆいばかりの雨後の雫が降ってくる。若葉を見上げている気持ちや、心地よ良さみどりの新鮮さを体で受け止めたいはずなのに、自ずと濡れることを避けて歩く、本能との微妙なずれを言い止めた。一見報告のようで、簡潔且つ自然体で詠まれた実に味わい深い作品。松下さんは「枯れ木の賑わい」と謙遜しながら句会を休まず出席し、亀のような確実な歩みを見せてくれている。

悲 鳴

貝 森 光 洋

自転車のなびかせている洗い髪  
悲鳴とは遅れて出るもの蝮かな  
頬の肉はみ出しているサングラス  
焼くほうが悲鳴をあげて毛虫焼く  
中々にしぶときものに金魚の糞

立 夏

松 本 文 一 郎

若葉風木々のてつぺん過ぎゆけり  
風 光 なる 飛沫しぶきを 顔 に 川 下 る  
鳴きながら地を啄める雀の子  
堀割の水紋やさし風五月  
手のひらに砂をこぼさば夏立ちぬ

せつじゆしゆう  
雪樹集

梅雨

永田

勇

水馬逢へば弾けてゐたるなり  
白南風や河口の波紋上り来て  
立ち座る膝の音して梅雨に入る  
紫陽花へ傘を一振り店に入る  
明け易し屋根を打ちたる俄雨

沖

久永

つう

練習の球児らに花越しの風  
沖からの風に若布の干されあり  
岬まで藪椿の路伝ひゆく  
廃線のレール伝ひに土筆摘む  
通勤の服決めかぬる花の冷え

# 蛍雪譚 六甲

焼くほうが悲鳴をあげて毛虫焼く 貝森 光洋

毛虫の方が悲鳴を上げるのではなく、毛虫を焼く残忍な行為をする方が悲鳴を上げるという一種のパラドックス（逆説）的な表現が読者を楽しませる。氏には「雪女郎悲鳴のごとく現れる」という名句が既にあるので、読み手にとつては悲鳴を上げるほど驚かないけれど、久しぶりに悲鳴二句、貝森節を楽しんだ。

水無月の戻つてこない竹とんぼ 梶浦玲良子  
水無月は六月、水の月で水を田に注ぎ入れる月の意。晦日（30日）には夏越の祓（なごしのはらえ）が行われ、神社では参詣人に茅の輪を潜らせて祓い浄める。邪神を和めるために行うからなごしと名付けたという。竹とんぼは、昔は子どもたちが自ら竹を割って削り、その腕を競った。勉強は出来なくても運動会や遊び道具を作るときには、主役を張る子がいた。そういう子は快活で明るく、夏場も病気など寄せ付けない。遊びに出かけたら鉄砲玉のように帰って来ない。いわばできの悪い竹とんぼ。

# 六花集

六甲選

堤内久美子

五月雨れて阿修羅の如き流れかな  
箒にて断ち切れど又蟻の列  
マシユマロを岩のごとくに曳ける蟻  
蟻の列時にはみ出し走りけり  
腰おろす切株くづれ羽蟻飛ぶ

田尻 勝子

曇天にあぢさみ覚めるやうにあり  
斑猫の香は鮮烈に少年期  
凄まじき夏草の中に老婦人  
川の瀬の飛石隠す夏の草  
月光の理科室に棲み着いてをり